認知言語学的アプローチによるスペイン語語彙学習・指導に関する新提案（その 4）
――「図地分化」の導入――

福森雅史

Resumen

Este tratado es la cuarta parte de la manera para enseñar las palavras españolas desde el punto de vista de la categorización conceptual. Los ejemplos concretos tratados aquí son “Hay *poco* vino en la botella. / Hay *un poco de* vino en la botella.”, “María se parece a Penélope Cruz. / ? Penélope Cruz se parece a María.” “A su lado yo soy pobre. / * A mi lado él es rico.” y tal y cual. Estos ejemplos se puedem observar del punto conceputual de “segregación de Figura y Fondo”. Esto mostra nuestra cognición por lo que lingüísticamente organizamos nuestro mundo externo a través del término “segregación de Figura y Fondo”.

Palabras claves : 図地分化（segregación de Figura y Fondo），焦点化（perfil），
図地反転（inversión de Figura y Fondo），認知言語学（lingüística cognitiva）

1. はじめに

前稿「認知言語学的アプローチによるスペイン語語彙学習・指導に関する新提案（その 3）―「メトニミー」の導入 ― 」では，我々が外界世界を認識し，様々な概念を体系化する上で，既に見た「投影」や「メタファー」と同様に，最も重要な認知活動の一つである「メトニミー（metonimia）」について観察した。この「メトニミー」には「近接性（proximidad）」の関係によるものと「部分と全体（parte y tudo）」の関係によるものとの 2 種類が存在する。さらに，前稿では，vuelta や girar といった語を採り上げ，特に「部分と全体」の捉え方を利用することで，第二言語の具体的な学習指導に反映させ得る手段の一つとして，どのように「メトニミー」を導入すればよいのか，その学習指導内容の一端を提示した。

この「部分と全体」の認識を用いて，我々が「部分」を認識する場合，人間の知覚認識上，「部分」単独で認識されることはない。というのも，我々は常に「全体」を「背景」，即ち「地」と見なし，その一部を「焦点化（perfil）」することによって「部分」を「前景」，即ち「図」として認識しているからである（cf. Langacker（1987: 184），（1988: 59））。ここに**「図（Figura）」**と**「地（Fondo）」**の対立が見て取れる。

そこで，以下では，まず**「図地分化（segregación de Figura y Fondo）」**を採り上げ，それ

が我々にとってどのように重要なのかを説明する。ひいては，第二言語の具体的な学習指導に反映させ得る手段の一つとして，どのように「図地分化」を導入すればよいのか，その学習指導内容の一端を提示する。

2.「図地分化」の構造

我々は外界事象を知覚するとき，外界から受ける刺激や情報を均等に受容しているわけではない。それらを，重要度が相対的に高い「前景」，即ち**「図（Figura）」**と重要度が相対的に低い「背景」，即ち**「地（Fondo）」**とに無意識的意識の内に振り分けているのである。このように，知覚した対象を「図」と「地」とに振り分けることを**「図地分化（segregación de Figura y Fondo）」**と言い，本来は心理学の分野で扱われていたものである。心理学の研究では，「図」は「地」よりも認識や記憶されやすく，また，何らかの意味や感情，美的価値などと結び付けられやすいことが指摘されている（cf. Dember and Warm（1979），Harber and Hershenson（1980））。

外界事象を知覚するに当たり，我々はより際立ったものとして「図」を知覚しているが，「図」として選び出されるものには，以下（1）に示されるような，それを特徴づける幾つかの要因が存在する。

（1）（1）2次元的に閉じている図形は図になりやすい（完結性）
（2）相対的に面積の小さい方が図になりやすい（大きさ）
（3）垂直・水平なものの方が斜めのものより図になりやすい（向き）
（4）単純・規則的・対称的な領域の方が図になりやすい（バランス）
（5）中央にあって，より近いところに見えるものが図になりやすく，背後に広がっているように見えるものは地になりやすい（奥行き）
（6）明るいもの，鮮やかなものは図になりやすい（明るさ）
（7）動くものは図になりやすい（動静）
（8）既存の意味や価値に関係づけられるものは図になりやすい（価値）

― 辻（編）（2013: 194）

こうした図地分化に関する認識は，単に外界事象を知覚するときに用いられるだけではなく，様々な言語現象にも反映されている。以下にその一例を紹介する（Cf. Talmy（1978），Langacker（1987, 1988））。

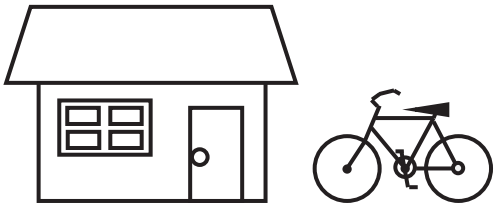
2.1. 位置関係に関する「図地分化」

たとえば，以下（1a-b）の文は，

（1）a. *La bicicleta* está cerca de *la casa*.（自転車は家の近くにある）
b. ? *La casa* está cerca de *la bicicleta*.（家は自転車の近くにある）

いずれも次の（2）のイメージ図に示されるような「bicicleta の指示物と casa の指示物とが近い位置に存在している」という同一事象について客観的に述べている文だと言える。

（2）

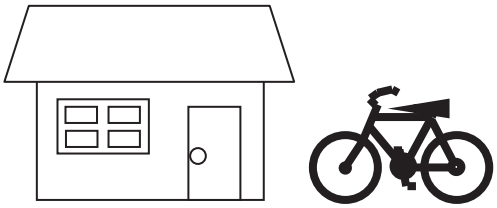


しかしながら，その捉え方という点では，以下に示されるように，両者は大きく異なっているのである。

まず，上出（1a）の文では，bicicleta の指示物は「図」として，casa の指示物は「地」として見なされている。以下（3a-b）としてイメージ図とともにそれを示す。

（3） a. *La bicicleta* está cerca de *la casa*.（自転車は家の近くにある）
図　　地

b.

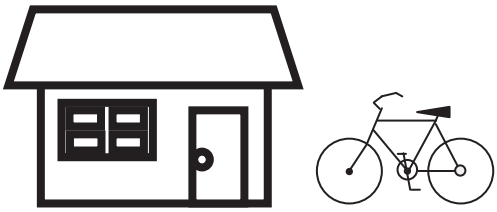


［※ ▬▬：図，　▬▬：地］

他方，上出（1b）の文では，「図」と見なされているのは casa の指示物の方であり，bicicleta の指示物は「地」としてみなされている。以下（4a-b）としてイメージ図とともにそれを示す。

（4） b. ? *La casa* está cerca de *la bicicleta*.（家は自転車の近くにある）
図　　地

b.



［※ ▬▬：図，　▬▬：地］

このように，外界事象の捉え方という点においては，両者は「図」と「地」とが全く逆転した表現であると言える。

しかしながら，これら 2 文の違いは，単に捉え方が異なるというだけではない。なぜなら，（3）

の文はよく用いられる表現であるのに対して，（4）の文はあまり聞き慣れず，おかしな表現の文だと感じられやすいからである。つまり，（3）は何の問題もない文であるのに対して，（4）は容認度が低い文になるからである。

（4）の文の容認度が低いのは，本来「図」として捉えるべきものと「地」として捉えるべきものとが入れ替わっているからだと考えられる。

上出 2.（1）で「『図』として選び出されるものを特徴づける幾つかの要因」について見たが，その中に「相対的に面積の小さい方が図になりやすい（大きさ）」や「動くものは図になりやすい（動静）」といった要因があった。これは，裏を返せば，「相対的に面積の大きい方が地になりやすい」，「動かないものは地になりやすい」ということになる。

つまり，本来は「図」として捉えられるべき「より小さい」「動く」ものである bicicleta の指示物が「地」として捉えられ，さらに，本来は「地」として捉えられるべき「より大きい」「動かない」ものである casa の指示物が「図」として捉えられたために容認度が低い文になったのである。

2.2. 類似性に関する「図地分化」

また，この図地分化の認識は，以下（1a-b）のような類似性に関する文についても応用される。

（1） a. *María* se parece a *Penélope Cruz*.（マリアはペネロペ・クルスに似ている）
b. ? *Penélope Cruz* se parece a *María*.（ペネロペ・クルスはマリアに似ている）

上記（1a-b）の文はいずれも「María の指示物と Penélope Cruz の指示物とが外見的に似ている」という同一事象について客観的に述べている文だと言える。しかしながら，（1a）がよく耳にするようなごく当たり前の表現であるのに対し，（1b）は聞き慣れない奇異な表現，即ち容認度が低い文だと通常，判断される。

このような違いが生じる原因は，（1a）では María の指示物を「図」，Penélope Cruz の指示物を「地」としているのに対し，（1b）では Penélope Cruz の指示物を「図」，María の指示物を「地」としている点にある。これを（1'a-b）として再度まとめる。

（1'） a. *María* se parece a *Penélope Cruz*.（マリアはペネロペ・クルスに似ている）
図　地
b. ? *Penélope Cruz* se parece a *María*.（ペネロペ・クルスはマリアに似ている）
図　地

上出 2.1.（1a-b）の位置関係に関する文の場合，「より小さい」「動く」という特徴を持つ bicicleta の指示物が「図」として，「より大きい」「動かない」という特徴を持つ casa の指示物が「地」として選び出されやすいことは既に確認したが，「より大きい」「動かない」ものの方が「地」になりやすいのは，その方が基準となりやすいからだと考えられる。なぜならば，「小さい」ものや「動く」ものは視覚で捉えにくいため，基準とするには相応しくないからである。

他方，上記（1a-b）の類似性に関する文の場合，Penélope Cruz の指示物はスペインの女優で，アメリカのハリウッド映画にまで出た世界的な有名人であるのに対し，María の指示物はごく普通の一般人である。つまり，知名度という点で両者を比較した場合，当然のことながら，Penélope Cruz の指示物の方が María の指示物よりもはるかに良く知られていると言える。そのため，Penélope Cruz の指示物と María の指示物の内，どちらが「地」として認識されやすいかと言えば，知名度という点でよく知られている Penélope Cruz の指示物の方がより基準になりやすいのである。このような理由から，（1b）は容認度が低い文であると判断されるのである。

3.「図地反転」の構造

この「図地分化」という認知活動に関し，我々はより際立ったものとして「図」を知覚しているが，相対的に「図」として選び出されやすいものとそうでないものとが存在することは，2.（1）で既に見た。しかしながら，時に，「図」と「地」とが入れ替わることが可能な場合が存在する。たとえば，下記（1）の**「ルビンの盃（Copa de Rubin）」**[1] と呼ばれる図は，その典型例である。

（1）

上図（1）では，白い部分を「図」，黒い部分を「地」と見なせば，中央に白い「盃」の形が浮かび上がって見える。逆に，黒い部分を「図」，白い部分を「地」と見なせば，「向かい合った 2 人の人」の形が浮かび上がってくる。このように，「図」と「地」とを反転させて認識することを**「図地反転（inversión de Figura y Fondo）」**と言う。

この時，注意しなければならないのは，両方の絵を「図」として同時に見ることはできないということである。つまり，一方を「図」として認識している場合には，他方は必ず「地」として認識されているのである。

この「図地反転」という認知活動は様々な言語表現にも反映されている。以下にその一例を紹介する。

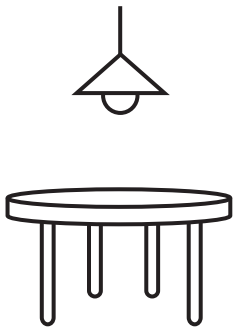
3.1. 位置関係に関する「図地反転」

たとえば，以下（1a-b）の文は，

（1） a. *La lámpara* está encima de *la mesa*.（ランプはテーブルの上にある）
b. *La mesa* está debajo de *la lámpara*.（テーブルはランプの下にある）

いずれも次の（2）図に示されるような，

（2）

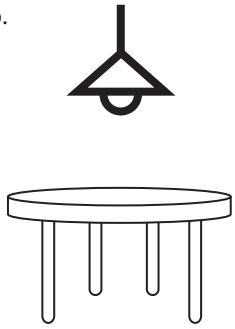


「lámpara の指示物が上に，mesa の指示物が下にそれぞれ位置している」という同一事象について客観的に述べている文だと言える。しかしながら，その捉え方という点では，以下に示されるように，両者は大きく異なっているのである。

まず，上記（1a）の文では，lámpara の指示物が「図」として，mesa の指示物が「地」として見なされている。以下（3a-b）として図とともにそれを示す。

（3） a. *La lámpara* está encima de *la mesa*.（ランプはテーブルの上にある）
図　　地

b.

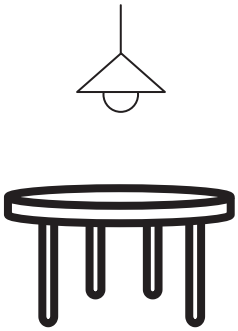


［※ ━━━：図，　────：地］

他方，上記（1b）では，「図」と見なされているのは mesa の指示物の方であり，lámpara の指示物は「地」としてみなされている。以下（4a-b）として図とともにそれを示す。

（4） a. *La mesa* está debajo de *la lámpara*.（テーブルはランプの下にある）
図　　地

b.



［※ ━━━：図，　────：地］

つまり，上記（1a）の文と（1b）の文とは，「図」と「地」とを反転させることで認識された関係にあると言えるのである。

3.2. ［poco ＋名詞］／［un poco de ＋名詞］における「図地反転」

以下（1）に見られるように，

（1）　**poco, ca**［ポ・コ，カ］　形［絶対最上級 poquísimo］

①［＋名詞］［否定的に］ほんの少しの，わずかな［⇔ mucho］：

Hay *poca* agua en el vaso.　　コップには少ししか水がない。

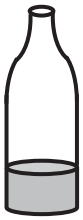
un poco de ...［＋不可算名詞］［肯定的に］少しの…：

Hay *un poco de* agua en el vaso.　　コップに少し水がある。

― 高橋（2006: 187）（下線筆者）

通例，poco の形容詞的用法で，不定冠詞 un を伴わない［poco ＋名詞］の形が「ほんの少しの，わずかな」のように，否定的意味を表す表現として定義づけられるのに対し，不定冠詞 un と前置詞 de を伴った［un poco de ＋名詞］の形は「少しの…」というように，肯定的意味を表す表現として定義づけられる場合は少なくない。しかしながら，下図（2）に描かれるような瓶の中の内容物であるワインの量に関して描写する場合，

（2）



以下（3a-b）のどちらの表現を用いればよいのか悩んでしまう学習者が多いのもまた事実である。

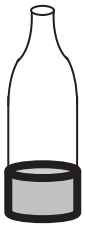
（3）　a.　Hay *poco* vino en la botella.（瓶には少ししかワインがない）

b.　Hay *un poco de* vino en la botella.（瓶には少しワインがある）

しかしながら，「図地分化」および「図地反転」の見地に立脚すれば，上記（3a-b）が表す事象は，各々次の（4a-b）のようにヴィジュアル化して学習者に提示することが可能となる。なお，太実線は焦点化することによって前景化したことを，また細実線は背景化したことを各々表す。

（4） a.

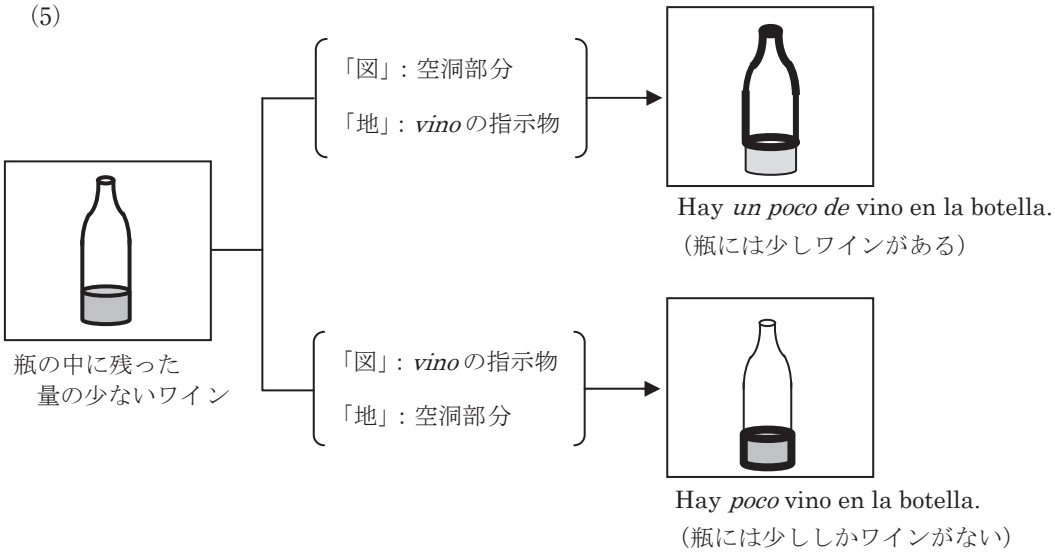
b.



つまり，［poco ＋名詞］の形を用いた（4a）は内容物である vino の指示物を背景化させることで「地」とみなし，容器である la botella の指示物における空洞部分を前景化することで「図」とみなすことで，「少ししかワインがない」ことを表している。これに対し，［un poco de ＋名詞］の形を用いた（4b）は内容物である vino の指示物を前景化させることで「図」とみなし，容器である la botella の指示物における空洞部分を背景化することで「地」とみなすことで，「少しワインがある」ことを表現しているのである。つまり，［poco ＋名詞］の形と［un poco de ＋名詞］の形との違いは，同一の事象において「図」と「地」とを反転させることで認識した点にあると言える。

上述の内容を次の（5）のような図で表せば，その違いをより明確に示すことができる[2)]。

（5）



3.2. Cuando 節における「図地反転」

また，この図地反転の認識は，以下（1a-b）に見られる cuando 節に関する文についても応用される。

（1） a. Cuando me llamaron por teléfono, me duchaba.
（誰かが私に電話をかけてきた時，私はシャワーを浴びていた）
b. Cuando me duchaba, me llamaron por teléfono.
（私がシャワーを浴びていた時，誰かが私に電話をかけてきた）

上記（1a-b）の文はいずれも「誰かが電話をかけてきた時」と「私がシャワーを浴びていた時」という 2 つの異なる出来事が同一の時点において発生したことを述べている文である。しかしながら，その捉え方という点において，以下に示されるように，両者は大きく異なっているのである。

上記（1a）の文では，「私がシャワーを浴びていた時」が「図」として，「誰かが電話をかけてきた時」が「地」として見なされている。つまり，あくまで「図」である「私がシャワーを浴びていた」ことを伝えたい文だと言える。以下（2）としてこれを示す。

（2） Cuando me llamaron por teléfono, me duchaba.
地　　図
（誰かが私に電話をかけてきた時，私はシャワーを浴びていた）

他方，上記（1b）では，「誰かが電話をかけてきた時」が「図」として，「私がシャワーを浴びていた時」が「地」として見なされている。つまり，あくまで「図」である「誰かが電話をかけてきた時」ことを伝えたい文だと言える。以下（3）としてこれを示す。

（3） Cuando me duchaba, me llamaron por teléfono.
地　　図
（私がシャワーを浴びていた時，誰かが私に電話をかけてきた）

つまり，上記（1a）の文と（1b）の文も，何を「図」とみなし，何を「地」とみなしているかが異なっているに過ぎず，さらに言えば，「図」と「地」とを反転させることで認識した関係にあると言えるのである。

以上見てきたように，「図地分化」や「図地反転」という認知活動を活用することで，日本語訳の機械的な丸暗記を偏重してきた伝統的な語彙学習指導では説明されなかった正しい語句や正しい文の運用能力を育むことも可能となる。

そこで，次セクションでは，al lado de という表現を採り上げることで，第二言語の具体的な学習指導に反映させ得る手段の一つとして，どのように「図地分化」や「図地反転」という認知活動を導入すればよいのかに関する更なる学習指導内容の一端を提示する（cf. 上野・森山・福森・李（2006: 454-458））。

4.「図地分化」の関係を用いた語彙学習・指導法の一例

次の（1）に見られるように，成句 al lado de は「或る物体の側面に位置すること」を表す。

（1）*Al lado de* la cama hay una silla. ベッドの横に椅子がある。

— 高橋（2006: 135）

さらに，西和辞典に目を移すと，「或る物体の側面に位置すること」を表す “al lado de” および “a su lado” という表現には，以下（2）に示されるような「比較」の意味用法があると記載されている。

（2） **a su ~〖lado〗/ al ~〖lado〗de ...**

1）…の横に，そばに：

Sientate a mi ~. 私の隣に座れ。

2）<u>…と比較すると</u>：

A su ~ yo soy pobre. 彼と比べたら私なんか貧乏だ。

—『現代スペイン語辞典』（s.v. lado,【成句】a su ~〖lado〗/ al ~〖lado〗de ...）

（下線筆者）

ここで，「或る物体の側面に位置すること」の意から「比較」の意へと拡張した理由は何なのかという疑問が生じる。当然のことながら，こうした意味拡張は決して偶発的に生じたわけではない。なぜなら，偶発的に意味拡張が起こるとするならば，あらゆる語が好き勝手に意味拡張を起こし，収拾がつかない状態になるはずだからである。つまり，そこには，この意味拡張を引き起こす原因となる「トリガー（gatillo）」が存在していると考えられる。

たとえば，同じような長さの2本の棒のうち，どちらが長いかを目分量で比べるとき，私たちは通常，2本の棒を互いに近づけ，真横に並べるという行為を行う。この「真横に並べる」という日常の経験から「比較」の意味用法が生じたのである。これを次の（3）にまとめる。

（3） **「或る物体の側面に位置」の意から「比較」の意へと拡張を引き起こす原因となるトリガー（gatillo）：**

「同じような長さをした2つの物の長さを目分量で比べるときには，それら2つの物を『**真横**』に並べる」という日常経験に基づく認識。

ここで，或る学生が上出（2）（以下に（4）として再掲）に見られる「比較」用法の用例を真似て，

（4） A su lado yo soy pobre.（彼と比べたら私なんか貧乏だ）

下記（5）のようなスペイン語の文を作ったとする。

（5）　? A mi lado él es rico.（私と比べたら彼なんか金持ちだ）

確かに，上記（5）の文は上出（4）の文と同じ統語構造を持っていると言える。また，両者の文が意味するところも，ほぼ同じ事象を示していると考えられる。そのため，上記（5）の文は，一見，問題の無い文であるかのように思われる。しかしながら，実際は，上出（4）の文が何の問題もない文と見なされるのに対し，上記（5）の文は容認度が低い文として見なされるのである。そして，この容認性の違いを説明することができるものは，「図地分化」の認識の観点をおいて他にはないのである。

上出（4）の文において，“a su lado” の部分は比較されるもの，即ち「基準」となっている。つまり，この「基準」と照らし合わせて，「私は貧乏だ」と述べているのである。そのため，この文では，“a su lado” の部分を「地」として，“yo soy pobre” の部分を「図」として認識していると言える。これを以下（4’）として記す。

（4’）　A su lado yo soy pobre.（彼と比べたら私なんか貧乏だ）
　　地　　図

同様に，上記（5）の文では，「基準」となる “a mi lado” の部分と照らし合わせて，「私は貧乏だ」と述べているのである。そのため，この文では，“a mi lado” の部分を「地」として，“yo soy rico” の部分を「図」として認識していると言える。これを以下（5’）として記す。

（5’）　? A mi lado yo soy rico.（私と比べたら彼なんか金持ちだ）
　　地　　図

「小さい」ものや「動く」ものは視覚で捉えにくく基準とするには相応しくないため，「より大きい」「動かない」ものの方が基準となる「地」になりやすいということは，既に，2.（1）や 2.2. で確認した。

ここで “rico（お金持ち）” と “pobre（貧乏だ）” との関係を大小関係で捉えた場合，どちらが「より大きい」かを考えると，当然のことながら，“rico（お金持ち）” の方が「より大きい」と言える。これは，所持するお金を数値で表した場合，“rico（お金持ち）” の方が「より大きい」数値になることからも伺える。

そこで，上記（4）－（5）において，この「大（rico）」／「小（pobre）」と「図」／「地」との関係を鑑みると，以下（4’’）－（5’’）のような関係になることは明らかである。

（4’’）A su lado yo soy pobre.（彼と比べたら私なんか貧乏だ）
　　地　　図
　　＝　　＝
　　大　　小

（5’’）? A mi lado yo soy rico.（私と比べたら彼なんか金持ちだ）

地　　図
＝　　＝
小　　大

つまり，上記（5）の容認度が低いのは，本来「大きい」必要がある「地」のところに，「より小さい」ものが位置しているからである。このように，この “al lado de” および “a su lado” という表現を用いる場合には，主語の指示物は比較するものよりも「小さい」必要があると言える。

また，この表現を用いる場合，比較をしているからと言って，“más ~” という比較級の形は使われない。また，本来は目分量で比べることに主眼が置かれているため，parecer のような動詞と共に用いられることが多いことも注意すべき点である。

そこで，以下（6）に，この “al lado de” および “a su lado” という表現を用いた「比較」の意味用法を用いる際の注意事項をまとめておく。

（6）" al lado de" および " a su lado" を用いた「比較」の意味用法の注意事項

a. **比較級は使わない**。

b. 本来は目分量で比べることに主眼が置かれているため，**parecer のような動詞と共に用いられることが多い**。

c. 人間は大きい物を基準にして２つの物を比べるため，この用法では**主語の指示物は比較する物よりも小さい必要がある**。

3. まとめ

本稿では，我々が外界事象を知覚するときに，相対的に重要度が高い「図」と重要度が低い「地」とに無意識的意識の内に振り分けるという「図地分化」という認知活動を観察することで，我々人間が外界世界を如何にして捉えているかについて，その一端を論述した。また，この「図地分化」の認識をスペイン語の語彙学習・指導に活用することで，これまで説明の難しかった［poco ＋名詞］と［un poco de ＋名詞］との違いや " al lado de" および "a su lado" を用いた「比較」の意味用法などの言語現象についても説明を加えることが可能となることを証明した。このことは，ひいては，学生のより深い理解と学習意欲の向上を期待することもできると考えられる。本稿がスペイン語学習者の一助になれば幸いである。

注釈

1.（→ p. 321）
「ルビンの壷」や「ルビンの杯」とも言う。スペイン語では “Jarrón de Rubin” とも言う。1915 年頃にデンマークの心理学者エドガー・ルビン（Edgar Rubin）によって考案された多義図形。

2.（→ p. 324）
英語表現 “little” と “a little” との違いについては上野・森山・福森・李（2006: 115- 118）参照。

参考文献

Bolinger, Dwight（1977）*Meaning and Form.* London, New York: Longman.（中右実（訳）（1981）『意味と形』こびあん書房.）

Cuenca, Maria J. & Joseph Hilferty（1999）*Introducción a la Lingüística Cognitiva.* Madrid: Ariel Lingüística.

Dember, William N. & Joel S. Warm（1979）*Psycology of perception*, 2nd ed., New York, etc.: Holt, Rinehart and Winston.

Harber, Ralph N. & Maurice Hershenson（1980）*The psychology of visual perception*, 2nd ed., New York, etc.: Holt, Rinehart and Winston.

Lakoff, George & Mark Johnson（1980）*Metaphor We Live By.* Chicago : University of Chicago Press.（渡辺昇一（訳）（1986）『レトリックと人生』大修館書店.）（Marín, Carmen González（trad.）（1986）*Metáforas de la Vida Cotidiana.* Madrid : Catedra.）

Lakoff, George & Mark Johnson（1999）*Philosophy in the Flesh : The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought.* New York : Basic Books.

Langacker, Ronald. W.（1987）*Foundations of Cognitive Grammar*（Vol. 1.）*Theoretical Prerequisites.* Stanford; Carif: Stanford University Press.

Langacker, Ronald. W.（1988）"A View of Linguistic Semantics" in Brygida Rudzka-Ostyn（ed.）*Topics in Cognitive Linguistics.* pp. 49-90, Amsterdam: John Benjamins.

Real Academia Española（= RAE）（1999）*Grammática Descriptiva de La Lengua Española,* Tomo. 1-3, Madrid : Editorial Espasa Calpe.

Talmy, Leonard（1978）"Figure and Ground in Complex Sentences" in Joseph H. Greenberg（ed.）, Universals of Human Language, vol. 4, Syntax, pp. 625-629, Sanford: Stanford University Press.

Taylor, John. R.（1989）*Linguistic Categorization.* Oxford: Clarendon Press.（辻幸夫（訳）（1996）『認知言語学のための 14 章』紀伊國屋書店.）

Ungerer, Friedrich & Hans-Jörg Schmid（1996）*An Introduction to Cognitive Linguistics.* London: Longman.（池上嘉彦 他（訳）（1998）『認知言語学入門』大修館書店.）

上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉（2006）『英語教師のための効果的語彙指導法 ― 認知言語学的アプローチ ―』英宝社.

河上誓作（編）（1996）『認知言語学の基礎 ― An Introduction to Cognitive Linguistic』研究社.

高橋覚二（2006）『もっと使える　基本のスペイン単語』白水社.

福森雅史（2007）『異言語間における動作主導入前置詞の概念研究 ― スペイン語・ポルトガル語・英語を通して ―』（大阪大學言語社會學會博士論文シリーズ Vol. 42）大阪大学言語社会学会.

福森雅史（2008）「異言語研究と実践語彙教育：「容器メタファー」に見る認知言語学導入の研究意義 ― スペイン語・英語・韓国語・日本語を通して ― 」『語学教育部ジャーナル』第 4 号，pp. 105-120，近畿大学語学教育部.

福森雅史（2011a）「認知言語学的アプローチによるスペイン語語彙学習・指導に関する新提案（その 1）―「投影」の導入 ― 」『立命館大学言語文化研究』第 22 巻，第 4 号，pp. 197-215，立命館大学国際言語文化研究所.

福森雅史（2011b）「認知言語学的アプローチによるスペイン語語彙学習・指導に関する新提案（その 2）―「メタファー」の導入 ― 」『立命館大学言語文化研究』第 23 巻，第 1 号，pp. 195-217，立命館大学国際言語文化研究所.

福森雅史（2012）「認知言語学的アプローチによるスペイン語語彙学習・指導に関する新提案（その 3）―「メトニミー」の導入 ― 」『立命館大学言語文化研究』第 24 巻，第 1 号，pp. 195-217，立命館大学国

際言語文化研究所.
森山智浩・髙橋紀穂・福森雅史 他（2010）『英語前置詞の概念 ― 認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から ―』（FD 語学教育改革シリーズ 1）ブイツーソリューション.

【辞書・辞典】

［*Corominas*］：Corominas, Joan & José A. Pascual（1980）*Diccionario Crítico Etimológico Castellano e Hispánico.* Madrid : Editorial Gredos.
［*DLE*］：Real Academia Española（2001）*Diccioario de La Lengua Española,*（Vigésima segunda edición）Madrid : Editorial Espasa Calpe.
北原保雄（編）（2003-2004）『明鏡国語辞典』大修館書店.
小西友七・南出康生（編）（2002）『ジーニアス英和大辞典』大修館書店.
高垣敏博 他（編）『小学館　西和中辞典』（第 2 版）小学館.
辻幸夫（編）（2013）『新編　認知言語学キーワード事典』研究社.
寺澤芳雄（編）（1999）『英語語源辞典』研究社.
新村出（編）（1998）『広辞苑』岩波書店.
山田善郎 他（編）（2004）『現代スペイン語辞典』（改訂版）白水社.
山田善郎 他（編）（2004）『和西辞典』（改訂版）白水社.